

聖書：コリント人への手紙第一 9：19～27

説教題：賞を得られるように走る

日時：2022年8月7日（朝拝）

コリント教会の中には偶像に献げた肉を巡って二つの違った意見がありました。一つはクリスチャンはそれを食べても良いとする考え方で、もう一つはクリスチャンはそれを食べるべきではないとする考え方でした。食べても問題ないと考える人たちの言い分は、偶像の神は実際には存在しないということでした。神は唯一で我らの主のみである。この知識に立てば、恐れずに偶像の宮へ行き、偶像に献げた肉を食べることができるとその人々は主張しました。そしてこう考える人たちがコリント教会では主流で強かったようです。そのため、偶像の宮での食事は正しいものではないと考える人々も、ついにはそちらに流されてしまい、その弱い人々が結果的につまずいたり、信仰から離れてしまうケースが出始めていたようです。パウロは知識を誇る人々の、このような弱い人々を顧みない態度は正しくないと言っています。そこで9章でパウロは、他者の益を考えて自分の権利を進んで放棄する自らの生き方を見本として示しています。前回の18節まで述べられたのは、使徒として当然受けることのできる報酬を、パウロはコリント人を思うため、その地の人々がつまづくことなく福音を受け入れ、福音に生かされるため、受け取らなかったことについてでした。今日の19節以降でもパウロは自分の証しを続けます。

19節で彼は「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました」と言います。パウロは今やキリストにあって与えられている自由を他の人々に仕えるために用いていると言います。具体的に20節ではまず「ユダヤ人にはユダヤ人のようになった」と言います。ある人は「パウロはユダヤ人ではなかったか。その彼がユダヤ人のようになるとはどういうことか」と思うかもしれません。しかしこの言い方から分かることはパウロは自分をここで言うような意味でのユダヤ人とはもはや考えていなかったということです。ユダヤ人のことが「律法の下にある人たち」と言い換えられています。パウロは「私自身は律法の下にはいません」と言っています。つまりここで言うユダヤ人とは、律法を誇りとし、様々な儀式的規定を守るところに自分のアイデンティティーを見出している人たちのことです。パウロはもはやそういう人ではありません。彼はキリストにあって律法の下から解放されました。しかしユダヤ人伝道のために、私は律法の下にある者のよ

うになったと彼は言います。具体的な例としてはテモテを伝道旅行に連れて行く際、彼に割礼を受けさせたことがあげられます（使徒の働き 16 章）。あるいはエルサレムに来た時には、律法を守るユダヤ人に合わせて彼らの慣習に沿った行動をしたこともあげられます（使徒の働き 21 章 20～26 節）。

その一方、21 節には「律法を持たない人たちには」と言われます。これは異邦人のことです。彼らに対しては律法を持たない者ようになった。しかしただこのように言うだけだと神の戒めを無視する者と誤解される危険があったからでしょう。「私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが」とパウロは注釈を加えます。パウロはキリストに結ばれている者として、キリストが明らかにされた律法の真意に沿って生きる者となっています。しかし異邦人に語る際には、彼らに合わせられる限りパウロは合わせました。この具体例としては使徒の働き 17 章に記されているアテネ伝道において、彼らの宗教心を認めたり、彼らの先祖たちの言葉を引用しながら彼らに語りかけている点に見られます。また 22 節に「弱い人たちには、弱い者になりました」とあります。弱い人たちは 8 章後半に出て来ました。偶像の宮で食事をして問題ないとする人々によって見下され、振り回されていた人々です。そういう人々を弱いとか知識が足りないなどと言って非難するのではなく、彼らの立場に寄り添って、彼らを獲得するため、その成長に仕えたということです。そして最後に「すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。」と続きます。もちろん伝道のためという名目で無条件で相手を肯定し、相手に倣うことが求められているわけではありません。相手を獲得するためと言いつつ神の前に罪を犯すなら、元も子もありません。ですから当然譲れないこと、譲ってはならないことがあります。しかしどちらでも良いようなこと、信仰に反しないことについては相手に合わせるのです。自分のメンツとか自分の持論、自分の権利、自分の利益などは後回しにするのです。

ではパウロは何を一番大切にしたのでしょくか。それが 23 節にあります。それは「福音のために」ということです。その他のあらゆることは、その下に従わせるのです。そしてパウロはこれをすべてのクリスチャンにも当てはまる原則として語っていると考えられます。私たちは果たしてパウロが証ししているように「福音のために私はあらゆることをしています」という生き方をしているでしょうか。私たちがイエス・キリストを信じて永遠のいのちを受け取って生きているのは、この福音のゆえです。

地上において様々な困難や戦いがありつつも将来の完全な救いを望み見て大いなる平安の内に歩むことができているのは、この福音のゆえです。そしてこの福音を私に実際に語ってくれた人がいて、この福音を信じる者となるよう陰で祈り、骨折り、様々な配慮をもって仕えてくださった方々がいて、私はこのかけがえのない救いをいただきました。とするなら私たちもまたこの福音が高く掲げられて人々に届けられ、人々がこの福音の祝福に生きるようになることをすべてに勝って大事な事として求めるべきではないでしょうか。その妨げとなることは極力排除するように努めるべきではないでしょうか。自分の権利、自分の主張したいこと、自分の名誉、自分のやり方、自分の好み、自分の楽しみなど色々あるかもしれませんが、福音が力強く人々に語られ、効果を発揮することを最重要の課題と考え、その他のすべてのことはその下に従わせるようにすべきではないでしょうか。

パウロはそうするのは「私も福音の恵みをともに受ける者となるためです」と 23 節後半で言います。これは私の救いは共同体全体の救いと切り離して考えることはできないということです。言い換えれば私たちは自分の救いを単に個人主義的に考えてはならないということでもあります。他の神の民の救いと私の救いとはセットです。他の人々の救いに自らも仕えるという歩みを通して、他の方々と一緒に、この私もともに救われるという恵みに浴する者へ導かれるのです。

さて最後の 24~27 節でパウロはクリスチャンを競技場で走るランナーにたとえます。コリントはスポーツの祭典が良く開かれた町のように、これは人々に良く訴えるイメージであったようです。このたとえのポイントは目標を見失った人のようであってはならないということです。クリスチャン生活は賞を得られるようにと一点に集中し、その目標のもとにあらゆる節制をする人のようなものであるということです。私たちは 24 節の「賞を受けるのは一人だけ」という言葉が気になって、「これはどういう意味か。賞を受けるのが一人だけなら、私はとてもあずかれそうにない」と思うかもしれません。しかしパウロはそういうことを言いたいわけではありません。またクリスチャンは一等賞を取るため、他の人と競争すべきであるということも聖書が語っていることではありません。テモテへの手紙第二 4 章 8 節：「あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」ですから栄冠は良く走った者すべてに用意されてい

ます。パウロが言いたいことは、クリスチャンは賞を受けることを目指して一生懸命に走り、取り組む人でなければならないということです。反対から言えば、参加することに意義があるというスタンスでタラタラ走る人であってはならない。あるいはゴールまでたどり着けばビリでもいい。天国の末席でも良いという考え方であってはいけない。一等賞を取るためにすべてをそこに集中して取り組む人のようであらなければならないということです。

ですから 25 節に「競技をする人は、あらゆることについて節制します」とあります。競技に臨む人は、賞を得るためにあらゆることを調整します。この後出て来るボクサーなら、たとえば減量します。暴飲暴食しません。また生活を整えます。賞を得ることと矛盾することはしません。肉体的にも精神的にも一つの焦点に向かってすべてを従わせ、自制します。より大きな目的に到達するため、より小さな事柄は進んで放棄し、剥ぎ落とし、捨てます。まさにそのことをパウロはコリント人たちに勧めているわけです。コリント人は自分たちは優れた知識を持っていると誇り、他の人たちを見下していました。また自分たちには権利があると主張し、それを行使することで心が一杯でした。しかし福音がさらに広がり、神の国が進展し、完成に至ることを最大の目標とするなら、それを妨げる可能性のあることは進んであきらめるべきです。より大きな目標のために道を譲るべきです。競技をする人たちは朽ちる冠を受けるためにそうしますが、クリスチャンに用意されているのは朽ちない冠です。それを思うなら、なおさらすべてのことについて節制するよう自らをコントロールすべきではないかということです。

26 節に「ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません」とあります。目標とはこれまで見て来たように、福音がさらに広められ、神の国がついに完成し、そこにおいて私とともに最終的な恵みを受ける者となることです。そこから目を離して、目標のはっきりしない、むなしい動きをする人であってはならない。反対に 27 節では、その目標に向かって自分を整えること、自分を従わせること、自分をささげることが勧められます。パウロもそのために努力しています。「自分のからだを打ちたたいて従わせる」という表現は強い表現ですが、すでに見たようにパウロが福音のために自活したこと、福音宣教とは別に生計を立てるための働きもしたことを思うなら、確かにそこにはこのような言葉で表現される苦闘があったのだらうと思います。あるいは前に見た 4 章 9～13 節にも使

徒たちが耐えた苦難が色々述べられていました。福音のために「この世の屑、あらゆるもののかすになった」と言われていました。それも、より勝る目標を見つめて「自分のからだを打ちたたいて従わせた」使徒たちの生き方だったと改めて教えられます。そして最後にこうするのは「自分自身が失格者にならないようにするため」と彼は言います。他の人に宣べ伝えておきながら自分自身がそこに生きていなければ、やがての日に失格者と判定されてしまいます。パウロたちでさえその危険がありました。そしてこれはすべての人にも当てはまります。あちこちをさまよい歩き、熱心にゴールに飛び込むまで走り切らないなら、その人は失格者となります。それは自分の救いを失うことにもつながりかねないことが次回見る 10 章冒頭で警告されることとなります。

以上の箇所から思われることは、果たして私は競技場で走るランナーの姿に似ているだろうかということです。目標を見つめて、その目標の下に自分のすべての生活を従わせる歩みをしているかということです。私たちはイエス・キリストを信じて終わりではありません。福音を信じて救いにあずかった私たちは、この福音の尊さを知っている者たちだからこそ、この福音が人々の間に広まり、一人でも多くの方々が福音の祝福にあずかるように導かれることを最重要の課題として歩むべきではないでしょうか。またすでに信仰へ導き入れられた兄弟姉妹がつまづくことなく成長して、ついに最終的御国が完成するようにと歩むべきではないでしょうか。そのように私自身が取り組み、奉仕する歩みとセットで私の救いもあると言われていました。

私たちは改めて「福音のために私はあらゆることをしています」と語るパウロの証しに導かれて、自らもこの目標のもとにすべてのことを位置づけ、整理して行動する者でありたいと思います。自分の権利とか、自分の好み、自分の習慣などは二の次、三の次にするように。「福音のために」を第一に掲げて、他のことは進んで後ろに持つて行く者であるように。もし熱心に走るランナーのようではなく、止まっている自分であることを思うなら悔い改めて、改めて目標を目指して走って行く者へ導かれたいと思います。そしてこの偉大な目標に向かって走ることのできる幸いを知り、やがて失格者となることなく、最終的な恵みにともにあずかる者、主から賞を受ける者となる歩みへ導かれて行きたいと思います。「私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをとともに受ける者となるためです。」